

抄 録

● 幼兒に於ける卵巢歇爾尼亞の莖捻轉

(Berliner Klin. Wochenschrift 1898. No. 35.)

伯林のH. Haass氏が十ヶ月の處女に就て實見せるところに依れば、患者は二日以來嘔吐、食事嫌忌、高度の衰弱、便通滯止等に悩み、且右鼠蹊部に一の疼痛性腫物あるを知れり。該部は既に出産後數日來蠶豆大の腫張を呈し、右陰唇は強く水腫様に腫大し、其皮下に鳩卵大の腫物を觸知せり。腫物の上極は狭く一の細莖に依て外鼠蹊輪の部分に續達し、鼠蹊管に於ての還納は全く不能にして打診音は濁音を呈せり

處置||濕性温電法、灌腸、の後新鮮なる糞便を排泄せしむ諸症尙依然として減退せず、乃卵巢歇爾尼亞と診斷せらる。歇爾尼亞截開術に依て歇爾尼亞囊に於ける総ての右側副器は顯著なる出血性硬塞を發記し強く肥大せるを認識せり。莖は喇叭管の子宮部及廣韌帶より形成し細長にして數回其軸を稔轉せり。種々の部に於て莖の結紮の上副器摘出術を行へり其後歇爾尼亞囊の化膿、囊頸部の結紮、皮膚創面の縫合、猩紅熱の發症によりて其輕快を妨げり。於是乎Meyer氏は先天性卵

巢歌爾尼亞の莖稔轉は其全く稀有ならざることを述べ特に醫家の注意を喚起せり。

●生後五日を經し處女の直腸膀胱閉鎖

Prager med. Wochenschrift 1898 No.35.u.39.

Edsmoer氏に依れば女子生殖器の此種の異常は從來吾人がリテラツールに於て唯其一例を見るのみなりと云ふ。

氏が實驗に係る患兒は稟質虛弱にして初め鎖肛 *Atrisia ani* の爲め結腸切開術を絶されしが三日にして腹膜炎を發し瀉馬鬼籍に入れり。兒が肛門の全き欠如たる其痕跡だも留めず加之の外腔口すら表呈せざりき。

反之會陰縫際は明瞭に大陰唇は常の如くなるを見たり。強く突出せる六仙迷長の象鼻狀の陰核は顯著なる包皮を有し。尿道は只僅に一毛を通し得べきのみ。膈は重複性にして兩膈は廣く雙角子宮に達せり兩子宮角は同長にて喇叭管は兩側共に一、五仙迷余何れも同形の小なる卵巢と連結せり。兩角の中隔は直腸の後部より上方に進及し中隔は穿通し佳長に發育せる膀胱後壁の *Trigonum Lieutandii* に於て小罅隙に依り開口せり。此罅隙の兩側に尙左右の腔内に通する二小管に裂口あり、膀胱及膈の内には胎糞を存し兩腎臟は發育根跡に止まり大部實性の輸尿管と共に接着し。右

の腔に沿ふて後方に附屬せり。

此實例たる單に直腸の膀胱と共に通ずるのみにしてミュルレル氏條の發育妨礙として顯發せしものなるべし然れ共其稀有なるに依て發育史上頗る重要なることを表明せん云々。

●半陰陽の三例

(Berliner klin. Wochenschrift 1893, No.25)

伯林の Hansemann 氏は半陰陽の三例を報告せり

第一例Ⅱは女性にして陰核の發育頗る過大なるを處置せられたり。秘尿生殖竇は形成して腔及尿道の内に開口し。外陰部は宛然男子の下尿道破裂に酷似せりと云ふ。

第二例Ⅱは一男子にして下尿道破裂を有し且其過度の發育に依りて外觀上確に前例に同じと疑想せしめたり。而も其奇怪なる既に女性の名を稱へ來り又女子として養育せられ加之嘗て或は男子と華燭の式を擧げしと云へども眞に彼の男子としての本性に至ては著者は毫末も疑惑を其間に容れざりしと云ふ。

第三例Ⅰは己に Deutschen med. Wochenschrift, No.38 に於て詳述せられたり。併し後に其文中說示せられし卵巢の如きものは一の睪丸なりし事を顯微鏡的検査にて証明し得たりと云ふ。

●生後十五日の小児―脊髓性小児麻痺―治癒

(Muenchener med. Wochenschrift 1897, No. 23)

Halk氏の實驗に依れば患兒は一日の經過中指趾の不全麻痺より進んで手、前膊、上膊、足、下脚筋肉の麻痺に波及し其間特に熱候、腦症爾佗一般の障礙を見ずして僅に四週の内に対症療法の下に完全なる治癒を得たり。

著者の意見に従へば此場合に於て麻痺現象の全く外傷性ならざることば幾多の原則より證識し得べしこれに同じく腦性麻痺若しくは多發性神經炎にあらざること亦容易く理會し得べく乃恐く急性脊體前角炎 Polomyelitis anterior acuta に歸由せむと思惟せられたり

此例の通例の經過と異なるは己に Duchenne Fils, Erb, Kennedy, 等の記載せる所によりて又實に明なりとす。

●小兒に於ける急性阿片中毒

(Muenchener med. Wochenschrift 1897, No. 15)

Demmler氏が治驗せし一例は實に生後六週を經し幼兒にして一夕兒赫として頻りに號泣す家人

時に愛憐の情に絶へず直に取て慎靜茶(Brunhills' tea)の一壺を與ふこは近憐の或藥舗より買ひ得たるものにて初め茶の一撮を一茶碗の熱湯にて漬し而して一二分時放置せり

然るに慮外(一)兒は須臾にして阿片中毒の特異の症徴を發顯し忽ち安眠快夢を破られ一家愕然として色を失ふ。乃沐浴、胃腸洗除、亞篤魯比涅注射等を施し五日を経て漸く治に就き花唇笑を含むで再び乳房を採るを得たり。

著者は由是「トロピン」の佳良なる作用を賞賛して止まず加之藥舗が種々の阿片劑の販賣と醫士し處方に非ずして此種の使用の嚴禁すべきことを注意し更に小兒に向つて阿片の危險なることに就て生母若くは哺母の教訓を勸奨するところありたり。」

抄譯者曰本邦にては彼食用紅と稱して現に諸種の菓子類に使用するもの甚だ多し曾て其中砒石又は有毒品の含在を詳しく試験せし人あり尙近時民間に鬻ぐところの雜多の葡萄酒の如き種々の色料を加へて粗惡の原品を偽造する奸商少なしとせずこれ皆所謂口に密あり腹に劔あるもの又豫め吾人の注意すべき所ならむか。』

以上五項 武生抄譯

漫 録

◎一件三行を讀みて

(不可思議—未可思議)

輪 濤 生

評家の必ず有すべき鋭犀精緻の筆も博考密証の素養もわれには欠乏せり、されど吾人は今常に進歩の境に在り議論の際素よ。幾多の誤謬なさを保せずと雖ども唯推理上己れの確信する所に據り他の瑕瑾を指摘し、若しくは佳處を發揮す是に於て批評の能事畢るなり、唯一片の信仰もなくして妄言するなさを要とするのみ、生前號、松浪氏が『一件三行』を讀み敢て淺陋を省みず茲に聊

か愚評を試みむとす、落筆匆忙、字句を鍊るに暇あらず、晦澁不遜の所亦少なからざらん、幸ひに推讀寛假せよ。』

骰子を投してこれを其前方より望み、その二なるの故を以て六面皆二なりといふ非也、これを其後方より見其五なるの故を以て六面皆五なりといふも亦非也、これを左方より見て以て一と爲し、右方より見て以て六と爲し、上より見、下より望みて以て或は三と爲し或は四と爲す皆非也。是れ其故何ぞや、一方より望みて以て其真相を鑿てりと爲せば也。

凡物の真相を判す、之を前後より望み、左右よ

り觀、上下より察せざる可からず、世人皆これを知る、而も多くは其一班を捕へて其全翁を評し恬然として耻づる所なき也

殊に人の言論を評す豈管に之を前後より見、左右より望み、上下より察するのみにて可ならむや、進むでは之を内に質し之を外に驗せざる可からず、之を遙に見、之を遠きに察せざる可からず、之を今日に推し之を他日に較せざる可からず。然れども茲に一個難事のあるあり、難事とは何ぞや、評者見識の如何是なり。

夫れ青色の眼鏡を掛けて萬有を望み萬物を以て青色と爲す非也、紫、綠、黃、赤、の眼鏡に於けるも亦然り、今見識は人の眼鏡也、若し見識に高下の區別あらば其眼鏡に青、紫、綠、黃、赤色の別なきを得むや、この眼鏡を掛けて萬有を望む一

人は以て青と爲し一人は以て紫と爲す、或は緑と爲し黃と爲し赤と爲す、其同色に見ゆるものは以て相雷同しその異色に見ゆるものは互に相誹謗す、紛々擾々定まる所を知らず、而も其事物の真相に至ては徹頭徹尾毫末の變なき也。此くの如くそれ然り、然るを今人言によりて或は善と爲し或は忠と爲し以て喜憂を爲すものあらば誰か其愚を笑はざらむや。

曩に點玄道人、特意の快筆を揮ふて誌上『漫漫錄』と載す、内に左の句あり

不可思議 宇宙もど不可思議なし、不可思議ある容らず、若しありとするものは畫きるなり、吾與るさず、不可思議はそれ未可思議なるべきのみ、宇宙遂に不可思議ある可からざる也。と

ア、作家見識の高きや優に富士が峰をも凌く可し、思へらく絶代の奇筆、曠野の卓見、字々警世の大聲、句々斬弊の利刀、眞に腐敗世界の照魔鏡、懶睡社書の大警鐘たる可し、と然るに何を圖らん前號松浪氏出で、『一件三行』を寄す巻頭先づ記して曰ひけらく。

世、豈に、不可思議の事なしとせんや、既に不可思議の字あり、佛に南無不可思議光如來あり、不可思議の事なかるべからず儒者亦曰く大極は無極也。と

其曰ふところ彼我全く相反せり等しく是れ宇宙を觀し而も其言の顯晦黑白相違せること斯くの如し。蓋し二氏見識の異なるものあれば也。極言すれば前者は是れ超越的——進歩的——積極的にして、後者は保守的——消極的——若しく

は學者の所謂 Dogmatic 也。

生初めて松浪氏の斯の言に接し、讀誦一過先づ其用字の奇警なると、其引證(?)の精妙なるに驚けり。然れども氏が論する所を詳細に演繹せよ、氏は冒頭先づ不可思議なかる可からずと斷言し、而も其根據とせる所は或は佛に或は僧に或は書に偏執し、唯區々たる字句言語に拘泥し屈伏し直に以て自己の論鋒立證と爲し強て其主旨を貫徹せんとせしに過ぎざる也。

敢て問ふ古來佛書の記するところ若しくは區々たる一僧侶の言ふ所一も二もなく皆是れ眞理に適合すと爲す歟、……………吾人の氏が説を以て曰。Smart 呼ぶも亦此点にあり……………余思ふに事の善惡は道に在り人に在らざるなり。理に在り書に在らざる也。

彼の賢人君子は學よく理を知り、行よく道を戴す、今この人を以て事を論す或は道理を以て事を測るに異なるまど無きを得ん、然れども賢人君子は遂に人にして道に在らざるなり、徒らにその人たる賢人君子を以て事を測りその本体たる道を忘るゝことあらば其非なる固より言ふを待たず、聖人は生而知乎、否余は之を信せざるなり釋迦は聖か孔子は聖か「キリスト」は聖か「アリストテレス」は聖か蓋し聖人とは其當時に於て最も群を抜き衆に越えたるものなり而して一宗一教の聖は其區域内に於て聖なり何れの時にか聖賢興らざる、何れの道にか聖賢なからむ、然も前聖は猶後聖の如きか是れ最も注目すべき問題なりとす。

氏亦末段に言はずや

右聖云 水は方圓の器に従ひ人は善惡の

友に據る、友擇はざは可からず。又曰く友擇はざるも可、己の思想堅固ならば足る

と其云ふ所彼我全く反せり。爲に 古聖

の言と雖ども、余輩初學の徒を迷はしむること多し。孔子曰く悉く書を信するは書なきに如かずと。(輪濤云余淺學不敏、嘗て此

格言の子輿の言なるを聞けり孔子も亦果して此言をなせしや否敢て問ふ)茲に於て乎

知る自己の判斷力の緊切あるを。と

善ひ哉言や、善ひ哉言や、即氏は茲に先づ古聖の言と雖ども時々確に吾人を迷はしむるものあるを言明し更に一步を進むで自己の判斷力の緊切なるを公言せしに非ずや。然るに氏は前段に於て奇怪にも不法にも區々たる佛語、僧談等を

踏台として頻りに自己の論鋒を逞ふせり、吾人に其意を解するに苦しむ、ア、盡く書を信するは則ち書なきに如かざる也、假令萬卷の書幾億の字句を羅列するも則たる一道の真理の光明に對しては毫厘の價値無き也、吾人の真理は首尾一貫千古動かす可からざる也。

次に氏は尙曰へり。

夫然り 不可思議の事を以て全く地を掃はしめんとするの希望は實に一人の抱負に
あらず吾れ然り井上圓了然り、哲學者然り。
然れども能はざるべし。

と何ぞ其言の壯大なる、吾人亦氏が此句の光焰萬丈雄偉奔放なるを贊賞して止まず。只夫れ結句一轉して單に『然れども能はざるべし』と云ふに至ては豈怪詭の情に堪かべけんや。

氏上段既に不可思議の事を以て全く地を掃はしむるの緊要適切なるを覺知せるにも係らず茲に何等の論證意見も加へずして單に『能はざるべし』と妄言す、所謂龍頭を蛇尾に終へしものならずや。若し夫れ強て『然れども能はざるべし』の論據搜索し來れば前の所謂、佛に僧に、文字に云々の源由に外ならざる也。斯くの始くにして氏は果して此重大なる論題に對する説明を盡し得たりとなすか。ア、氏の如きは尙舊套を墨守して一小天地に踟躕するものに非ざるか、廣く各方面に涉りて縱横に論議批評するを得べきに敢て之を試みず、徒らに勃率の理窟を並ぶるを知て活動せる社會の現象を省みざるの類に非らざるか………曲筆を弄して世を誣ふ其人を惡むに非ず其の言を咎むるのみ。氏請ふ去りて

進化論の一斑を讀め必ずや悟了するところあら
む。

嗚呼余輩は以上氏の徒らに人(古聖と雖ども)の
言ふところ記するところを以て唯一の論證と爲
せるに對して其必ずしも常に然らざる所以を論
難したりき、これより更に余が鄙見を陳じ進む
で社會進化の原理を辨明し氏と余と根底に於て
如何なる異見を有するかを明にせむとす。

余の考ふるところを以てすれば社會は日に月に
進歩したるものゝ如し、然り社會は何れの方面
より考ふるも進歩したるものゝ如し、然り社會
は既往の歴史に徴して昭々乎として其進歩した
る事實を知るべきなり、否、社會は進歩しつゝ
あるものなり、否社會は進歩すべきものなり、
否社會は進歩せざるべからざるものなり、社會

の發達進歩は宇宙の大原則なり、自然の企圖す
るところにして決して止む能はざるもの也。

歴史以前幾百年を経たりとするも其間絶へず進
歩したるや知るべきなり、則ち其書契の以て徴
するに由なく、四方漠然たる時代は則ち正實な
る記録を生じて一目瞭然たる時代の基礎階梯を
爲せしや疑を容れざるなり、凡そ事物の完全な
るは其源不完全なるものより來るなり、而して
一説の起り一學の生する皆古來無數經驗の結果
に由る、「ニュートン」が地球の引力を發見し、「
ロバート・フルトン」が蒸氣船を發明し、「ワッ
ト」が蒸氣機關を發明したるが如き固より其人
の苦辛慘憺の結果お外ならずと雖ども前代より
幾代の經驗を積み來りて漸く此等逸才の人に傳
りて初めて顯然世に公にせらるゝに至りしなり

獨乙の「カント」はKritik der reinen Vernunftを著して心理學上の問題を説明し米國の「フランクリン」は雷と電氣の同一なることを證明して今の避雷針を創め、伊太利の物理學者「ガルヅァニー」はGalvanismといふ一種の電氣を發見し、化學には佛に「ラヴフォアシール」出で斯學を進歩せしめ、植物學には瑞典に「リンナ」出でゝ初めて分類學を創む此くの如く第十八世紀に於て駭々乎として人智發達し、社會進歩し、以て今日の隆盛に達せり。

これ等は皆過去幾百千年以前に於て不可思議（否、不可思議）として看過せられしことの遂に可思議に歸達せし所以のものに非ずや。

然るに氏は曰く

我却て 未可○議の言却て聞、初て見る

寧ろ之の言を以て不可思議のこととせん未
可思議の言可思議に歸することあるか、否
永く不可思議か。と

噫呼何ぞ夫れ冠履顛倒、臆測謬見の甚だしき、井底の蛙は大海あるを知らず、燕雀の徒は鵠鴻の志を知らず、吾人は餘りは其定見なる其論の嚙語に似たるを見たと一笑に附し去らむ耳。

殊に「未可思議の言、可思議に歸することあるか、否永く不可思議か」と云に至つては恰も痴人の夢を説き僇夫の劇を評するが如く、荒唐無稽殆んど其意を得ざるなり。

徒らに辨難妄言するを止めよ、卵の鳴らざるを責むるは抑々愚のみ、日進み月來れば、物皆開化の機に達すべし。

社會の進歩を促す百般の學術工藝等亦皆初より

完全なるものに非ざる也、甲者一術を創め、乙者之を次ぎ之を進め、丙者之を應用擴張する如く、少なくとも數代の手を経ざれば完全なる域に達すること能はざる也、而して醫學、衛生、政治、社會、經濟、等皆又然らざるはなし

曾て聞く宗教は信を以て立ち、學術は疑を以て立つと（宗教上に就ては予尙聊か持論あり茲にはこれを畧す）

只サイエンスより是を云へばツワイフェルありて初めて進歩を見るべきのみ、東人は凡て不可思議を以てアブソルートのものとなし一意「信」を貴しとなす、然るに彼れ西人は「疑」を以て美とし、疑は即智識の母と稱す、是れ東洋の後るゝ所以、而して西洋の進む所以矣。

且夫れ、不可思議と云ふ、これ茲に止まれるな

り、限れるなり「未」に至りては則ち「未」なりと雖ども猶一点の光明伏在す、換言すれば「未」の存する間はこれ學者の達せざる所にして宇宙の秘密を知悉し得ざる時なり

反之「不」は則ち「不」として許すなり、信するなり、吾人は恐る未可思議をも不可思議として終らんことを、古來學者の以て Dogma となし排拆論難するもの固より偶然にあらざるなり。嗚呼トグマあらば學術の進歩は得て望むべからず、苟も今日日新的學術界に立つもの豈徒らに不可思議云々を口にすべけむや。

吾人は最後に生物學上より論及して更に其主旨を判明にし一先づ茲に本論を終へむとす。

夫れ自己が種屬を繼續せしめ子々孫々形質を遺傳せしむる所以は段々高尙なる地位に進ましめ

んとするものなり、故に皆出藍の逸物を得んことは自然の望むとあるなり、然り而して其證據は原人時代より今日に進みたる大勢に於て歴然として火を見るが如し、親は子に其社會に於て得たる智識を傳へ、子は又幾分か之を増大して孫に傳へ歩一步進化して高尚なる人間を生じ遂に萬有の眞理を悉く覺り得るに至らしむ萬有の理を覺知し終れば初めて完全なる大聖人となれるものなり、此大聖人となる固より容易の業にあらず然れども此目的を以て漸又漸に進みつゝあることは己は陳ぶるが如し當時最勢力ある生物學者「ワイズマン」氏の *Continuïtat des Keimplasma* の如きば人間が初め極めて下等なる動物より進化し來る間に生殖部は不死にして無窮の傳へ段々高尚なる子孫を生ずることを説明せしむ

のどす即斯くの如く其得たる智識を漸次其子孫に傳へて益々高尚なる人間を造り倍々宇宙の眞理を探究し遂に悉く宇宙の眞理を覺らしむるの必要あれば也。

於是乎吾人は宇宙遂に不可思議ある可からざるを信じて疑はざる也。……………吾人は再呼す……………宇宙もど不可思議なし不可思議ある容らず若しありとするものは畫さるなり、吾與るさず、不可思議は、それ未可思議なるべきのみ、宇宙遂に不可思議ある可からざる也……………

頃者一夕點玄道人を訪ひ、談偶々此事に及ぶ、時に道人微笑一番筆を執りて傍らの紙片に書と墨痕淋漓、實に左の句あり

ア、松浪談ずるに足らず

イナ未だ談するに足らざる也

短にして鋭簡にして完、一頓極抄、一句喝破、所謂、寸鐵殺人者、敢て添記して以て氏に呈す、不知、松浪氏たるもの、これに對し果して、如何の感かある。

余不肖剪劣を省みず、氏が「一件三行」を讀み、

唯大体の論旨に於て首肯し得ざるものに對し、所思を述ぶること斯くの如し。言或は冗漫に流れ、無禮に馳せ往々氏の尊嚴を傷りたるもの蓋し多からむ。文學作物の上より延て其人の身上を攻撃するは決して批評の正當なるものにあらず、吾固より之を知る、知て之を敢てするものは他なし、氏に一種の才能と意氣とあるを認めればなり、唯惜ひかな氏に識高からず、胸中或は俗氣の蟠れるを見る、此俗氣、此見識、こ

れ氏の作をして却て無味に陥らしむる所以、余が氏に忠言する所以亦此に在り、氏願くは凡を離れ、俗を脱して自から標置する所あれ。余は氏の精勵又感するの餘り此の不諱の言を述べて座右に呈す。氏果して吾が言を容るゝの量ありや否や。

恐惶謹言

六月五日夜脱稿

雜咏

中西政太郎

○雪中聞鶯

梅とはや綻ひぬらし白雪の

かゝれる枝に鶯の鳴く

○花 筏

散りぬともいこゝめてよし三吉野の

川に流るゝ花筏かな

○待郭公

初聲のさかまほしさに時鳥

幾よ有明の月を見し哉

○全

奥山にふみ分け入りて郭公

聞かまほしさに今日もくらしつ

○郭 公

都へはいかゝなるらん郭公

わか山里は今そなくな。

○梅 雨

月影も思ひたぬたる昨日今日

こむ友もかな五月雨のころ

○泉邊涼

むすはむと立ちよりすれはいは清水

面を拂ふすと風を吹く

○避 暑

家つとになさまほしくも思ふかな

たもとにみてる磯のすゝ風

○硯

波風もたゞぬ硯の海なれど

のそめはさわくこころこそすれ

○上野公園なる南洲翁の像を見て

其のかみの翁が心ををしはかり

てよめる

心にもあらぬ輩をいかにせむ

いて歸らなむかこ島の里

雜

報

●間部豊氏 東京赤十字社病院にありし同氏は

日金澤病院醫員を囑托せらる

今般同所を辭し郷里に於て開業せらる

●竹田乙三郎氏 岐阜病院を辭して金澤病院醫

●森田齋次氏 郷里に開業中なりし同氏は今般

員拜命藤井氏後任として眼科に奉職せらる

福井病院に聘せらる

●筑紫末雄氏 東京痘苗製造所にありし同氏は

●臨床講義場運動部再興 久しく廢絶の有様な

今般近江彦根病院に聘せらる

りし臨床講義場内運動部は這般數氏の幹旋に依

●太田多計作氏 金澤病院醫員たりし同氏は今

●春期行軍 五月九日より一泊の豫定を以て安

般香川縣高松病院の聘に應し赴任せらる

宅附近は於て催さる會するもの四百有余名昂然

●田中吉六氏 山田止善堂病院を辭し太田氏と

劍を撫して起つ北海の浪石川の野浩然之氣養ひ

共に高松病院に聘せらる

得て余あり幽窓徒に春艸を夢むる者は此精味を

●藤井助雄氏 金澤病院眼科にありし同氏は五

解する能はさるなり

月より内科第一部へ轉せらる

●書籍惠與 教授下平用彩先生は醫科第二年よ

●末岡外治郎氏 金澤病院内科醫員同氏は辭職

り四年に至る迄全學生に高著に係る外科汎論一

の上富山縣富山病院へ轉任せらる

冊づゝを惠與せられたり茲に謹んで鳴謝す

●田代保二氏 本校醫學部副手たりしが四月八

●高安教授洋行 主事高安教授は眼科學研究の

爲向二ヶ年間獨逸國留學を命せられたり先生や
我校に入りて教鞭をとらるゝこと十余年其間醫
學部主事として校務に盡碎せらる吾人今や此良
師を失ふに當りて心裡哀々禁ずる能はざるもの
あり然りと雖も斯道の爲之を思へば先生の爲大
益を擧げて其行を壯にせざるを得ざるのみ思ふ
に向後二周歲先生の名聲一段の光明を添ふるわ
らん、吾人鶴首して俟つ

● 高安教授送別會 四月一日午后一時より學生
一同高安先生の爲金谷館に於て送別の宴を張る
撃拆丁々開會を報ずるや河内監治郎氏起て開會
の辭を述べ醫學科三年級總代中西政太郎氏同二
年總代山碕芳太郎氏其他深美貞之助小林茂樹八
牧政孝眞柄佐一郎田中秀夫湯本四郎右衛門の諸
氏續々相繼て登壇滿腔の赤誠を捧げ袂別の辭を
述べ終りに先生の答辭あり酒三行にして衣を約
して歌ふもの劍を抜て舞ふもの鹿酒鹿肴分に居
て聊か我意を盡せるものあり高安先生萬歲を三
呼して散會せしは午后六時、

● 臨床講義場武道大會 七月四日午后の時半よ
り高安教授の歐行を機として武道大會を臨床講
義場に催す高安教授を初め會するもの八十名得
意の手腕を揮ふて散會せしは午後六時なりき

● 高安教授送別式 七月五日午后一時より本校
靜勝館に於て舉行せらる席定まるや高安教授北
條校長に導かれて場の正面に進まる校長先づ職
員を代表して嚴格なる調もて送別の辭を述べ次
て深美貞之助氏學生一同に代りて送辭を朗讀し
積年黨陶の勞を謝し終りに教授の謙遜なる答辭
あり之にて全く式を終ゆ

- 高安教授出發期 來る八月中旬金澤出發九月十三日佛蘭西船に乘り渡歐の途に就かるゝ由
- 木村教授歸朝期は來る十一月頃々らんどいふ
- 鈴木學士 四月下旬再び「キイル」に歸られ歸朝の途につかるゝ由金子教授の許に音信ありたり拜眉遠きにあらざるべし

